

僕がケアマネを取ったワケ

一急性期医師が考える介護との連携とまちづくり

連載第30回 エピローグ:すべてに先立つもの、それは「愛」

無条件に与える(=愛)

約半年にわたる連載では、今まで、思い、考え、やって来たことや、僕の妄想をお話ししてきました。まとめとして、その中核ともいえる僕の活動の背景にある「思想」をお話ししたいと思います。

天才と言われた、ブレイズ・パスカルは、著書「パンセ」の中で、人間の精神の偉大さを「人間は考える葦(あし)である」と表現しました。なぜなら、人間の精神は、「認識する」ことができるが、あらゆる物体、すなわち大空、星、大地、その王国などは、それらの個々も総和も「何も認識しない」と。さらにそれより偉大なのが、「精神」よりずっと小さな「愛」であると言いました。あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらすべての業績も、「愛」の最も小さな動作にもおよばない。「愛」は無限に高い秩序に属するものであると。

レフ・トルストイは著書「人は何で生きるか」で、「人は愛によって生きる」と言いました。人々は「わが身への配慮」で生きてると「錯覚」しているが、本当は「愛」(他人への配慮と言えるかもしれません)によって生きると。そして、神は人間が、てんでんばらばらに生きることは望まず、むしろ人間が一緒になって生きることを望むと。

エーリッヒ・フロムは「愛について」で、我々が生きる社会では「愛する」ことは容易ではなく、「現在のようなシステムのもとで人を愛することのできる人は、当然例外的な存在」であり、「愛」は習得すべき「能力」「技術」であると。そして、「愛することのできるためには、人間は最高位に立たなければならない」。すなわち「人間が経済という機械に奉仕するのではなく、経済機械が人間に奉仕しなければならない」と。愛の能動性の要素の一つに「配慮」があり、こういった「愛の可能性」を信じることは、人間の本性そのものへの洞察に基づいた、「理にかなった信念」であると言いました。

東洋思想の一つ、老子は、こういった人間を含む自然界の「普遍的な目に見えない法則」を「道」と表現しました。作為的な行為ではなく、「無為自然」の行為が大切で、「三つの宝」として「慈しみ」「つつましさ」「人の先頭に立たないこと」を示し、さらに「小国寡民」を理想郷とし、その本質は「身の回りを大切にする」「自分の命を大切にする」「足るを知る」といったことになるかと思えます。

東洋西洋を問わず、哲学、宗教、思想、それぞれ表現は違いますが、言っていることや方向性は同じです。「人間」というものは、本来的に「愛」を内在しており、いわゆる「自己中」に生きるより、「身の回り」から始まって「世のため人のため」に「愛=配慮=慈しみ」を持って生きる方が、幸せ(心の安定とも言えるかもしれませんが)を感じるものだという事です。

今の世の中の環境や社会システムでは、本来人間の持つ「愛」を表出できない状況になっているのだと思います。局所的にでも環境さえ整えば、「愛」は表出される。思い起こせば、皆さんもそういう経験が、案外たくさんあるのではないのでしょうか。親子の関係、親友との関係、恋人との関係、部活や仕事など苦楽を共にした中での関係、見知らぬ人の善意、仕事上で思わずのめり込んで相手を手助けする、同じ職場の同志など。

よく思い出してみると「幸せな気持ち」になった時は、「無条件に与えること」をしたりされたりすることだった、と思うのではないのでしょうか。相手の、そこにあるありのままの姿を受け入れ、それに無条件に反応して与える。これこそが、宗教や思想などで述べられている「愛」の本質。

条件付きで与える(≠愛)

今の世の中では、システムとか計画とか「形」や「管理」が重要視され、また資本主義社会では、

弱肉強食、そして当然「利益」が重視されます。エーリッヒ・フロムの言う通り、このような環境では、個々の人たちの「愛=無条件に与えること」を表出することは難しく、結果として「幸せ」もないがしろにされている感じがします。世の中のほとんどが、何かしてくれたり、自分の利益になることがあれば愛するという「条件付きで与える(≠愛)」。

人間がそういうマインドになってしまう社会構造。皆さんも、その構造に薄々気づいているはず。「条件付きで与える(≠愛)」が多くなるのは、人間の問題ではなく、社会構造が生み出す結果なのだと思います。その構造を変える可能性を秘めているのが、再三お話ししている、複雑適応系・自律分散という「人間という生命体」を尊重した考え方なのです。

日々の生活費を稼ぐための仕事、家庭での役割、また息抜きの楽しみや雑事などに追われて、「自分のことで精いっぱい」の毎日を送っていると思います。「現実問題、いわゆる綺麗事を言っても世の中は生きていけない」と思う方も多々いると思いますが、たまには、こういった世界中の人々が共感するような「目に見えない普遍的



な法則」という概念に触れて、自分なりに解釈して実際に「行動」を起こしてみることが、「心の安定」ひいては「皆さんの幸せ」につながるヒントを与えてくれることになると思います。

「行動」は、目の前の小さなことからでいいのです。無条件に人のために何かをして、それが喜んでもらえる、誰でも嬉しいものです。「もう少し何か行動を起こそう!」と奮起しても、1人では何もできないと落ち込むかもしれません。でも、僕もそうであったように、まずは自分でできる範囲で行動してみる。そして周りに思いを伝えていくと、こういった概念の感覚を、肌で共有できる方は案外たくさんいますので(いろいろなことをやってきて心底そう思いました)、その人たちと一緒に行動を起こしてみるのがいいのではないのでしょうか。こういった「無条件に与える(=愛)」の行為が、本当の意味での「ボランティア」であり、それを知らず知らずのうちに「趣味」と称して僕も行ってたのだと、今となっては思っています。

実質的に自分のいわゆる「利益」にならないさまざまな活動をしています。そういう僕は幸せを感じています。もちろん、無条件に与えても、受け入れられなかったり、裏切られたりすることもあります。でも、勇気を持って「愛=無条件に与える」行為をすること、その能動的な行為そのものに、人間としての本来的な価値や幸せ



札幌里塚病院
内科科長

松永 隆裕氏

があると思うのです。

愛は「公理」

あっ、そうだ! AIのディープラーニング(深層学習:画像認識、自動運転などに応用)の学習構造に興味があり、前回の連載でお話しした、中部大創発学術院での数学者津田一郎先生や画像認識の専門家藤吉弘巨先生らとのディスカッションの後で、「AIと人間の脳」、ひいては「コンピューターと人間」を対比して深く考察するにつれて、つい最近、人間のマネジメントにおいて一つの確信に至りました。

「愛を中心に感情に配慮して、エラーから学べる環境を整えることが、自己学習や創発を生み出すマネジメントになる」これが、最強ということ。

これは、「遺伝子情報」「恒常性の維持」「自己複製能力(=生殖能力)」「エネルギー変換(=食物摂取)」そして「睡眠(=脳の休息)」「人間の3大欲求=本能」を持つ生命体である「人間」という「種の保存」、つまり「種としての生き残り戦略」という観点から、「愛」は最もエネルギー消費が少ない「遺伝子情報」としての「方法論」と考えることができるからです。

食物確保が不安定だった大昔に、「種」を維持するためのエネルギー消費を最低限にする方法、それが「意思を持った生命体」である人間の関係性における「愛」と推論できます。あらかじめインプットされている遺伝子情報の一つということ。

他者に対して無条件に何かを行うときに、「心の安定」や「幸せ」を感じる。そういう時に、一番エネルギー消費量が少ない感じがしませんか? 他者との摩擦や、さまざまな思惑など、余計なことにエネルギーを使わなくて済みますよね。

信念、思想や宗教の観点ではなく、「愛=無条件に与える」を「厳密に客観的」である、「物理学的観点」である「エネルギー」、「生物学的観点」である「種の保存」から捉える。前述の津田先生に、このお話をしたら、「愛は心の一表現形態だから、『心が数学』であるなら、『愛は数学』と言えると思います。数学では『無条件に与える』のは『公理』(論証がなくても自明の真理として承認)です。種々の公理が愛を表現しているのかもしれない」とのお答えでした。「愛=無条件に与える」は、純粋に客観的な数学的にも「公理」ということです。

最後に、幼少期から、「愛」が重要なのだという「気づき」に結びつく実体験や、現在行っているさまざまな活動のベースになる考え方のきっかけを与えてくれている母、そして地道に真面目に実直に、そしてきめ細やかに仕事をしていくことの大切さ、現実社会の厳しさを言葉や背中

で教えてくれて、常に僕の理想論に対する甘さを指摘して、現実社会で実効性を持たせるにはどうすれば良いかを考えるきっかけを与えてくれている水力発電所の設計・製造の技術者であった父、また、いろいろな話を聞いてくれて、実際の僕の仕事や活動を見ながら共感、励まし、そして前に進む勇気を与えてくれている大切な方に感謝して、連載を終了させていただきます。

新元号「令和」となり、時代は新たな節目を迎えました。僕にとっても、節目の年となります。この秋からは新天地で、「愛」を大切にしながら、「複雑適応系マネジメント」の医療介護現場への実装、そして、今までのさまざまな「妄想」を「構想」に変え、社会実装するための新たな展開を目指したいと思います。(おわり)

